

「第7回全国健康むら21 ネット全国大会 IN 大阪」の大会レポート

全国健康むら21 ネット世話人 大杉幸毅

平成24年4月21日ドーンセンター（大阪市天満橋）で開催された講演会報告と感想

まえがき

全国健康むら21 ネットが故甲田光雄先生の呼び掛けによって発足してから7年、世話人は忙しい合間縫って毎月会合を重ね、熱い議論を重ねながら進んできた。その歩みは遅々たるものであるが確実に実績を重ね、広がりつつある。会としての独自の実践活動の中では、吹田市の「健康の森」で毎月開催している「健康塾」は好評を得て今年で5年目になる。世話人は各自各分野での健康むらの掲げた活動の実践者である。それを健康むらの活動として広げていけばいいのではないだろうか。

甲田光雄先生の提言された「健康むら」の活動目標は、からだの健康だけにとどまらず、社会の健康を目指す世直し運動といってもよい。私たちが健康で幸せに暮らすには、社会や自然環境が健康でなければならない。しかし、現実残念ながら社会も自然環境も悪化の一途をたどっている。少食の実践と普及、医・農・食、教育の再生、地域づくり、人づくり、安心安全な社会、「いのちより経済優先社会」の改革などなど。具体的目標は病人を減らすこと、健康むらから病人を出さないこと。私の描く「健康むら」のイメージは次のとおりである。

健康を維持する根源は、健全なところとからだと社会との健全な関わりであり、健全なところは人と人との助け合い（共助・共生）にある。今、無縁社会と言われる絆の薄れた日本の社会を再生する地域づくりが必要である。健全なからは健康的な農産物により養われる。そのためには土が健康でなくてはならないので有機農業を再生させる。そのための後継者を養成する。都市消費者の意識改革と生産者との交流、相互理解を図る。いのちよりも経済優先社会を変えるためには、各人が「足るを知る」生活に変えていく意識改革をする。「少食に医者いらず」地域の伝統食を腹7分目いただければ、省エネで環境にやさしい健康的な生活ができる。

大会報告

今年の大会は「日本の農業と TPP 問題」、「脱原発と暮らし」「健康問題」の三つの分野での分科会を企画したが、時期尚早で取りやめた。内容的には三つのテーマに近い構成であった。

小山 登代表の挨拶で印象的だったのは、「農業体験をしたことがない者は国会議員になるな。農忘れたら国は亡びる。」ローマ帝国の例を出すまでもなく、TPP で日本人の食糧はアメリカ資本に支配されようとしているのである。

佐藤喜作顧問（日本有機農業研究会理事長）の挨拶は、「福島原発事故の戦犯は誰だ？」誰も責任を取らない無責任社会の構造を鋭く指摘された。日本に原発を導入したのは米国大統領元補佐官 K 氏の弟子の元総理大臣 N 氏。彼は人類初の原爆体験を持つ「核アレルギー」の強い世論を「核の平和利用」と問題をすり替えて世に訴え、有力新聞社社主で代議

士 S 氏がマスコミを使って大キャンペーンを張り日本人を洗脳した。最近、彼は米国中央情報局のエージェントであったことが米国外交秘密文書の公開で明らかになった。原発問題は、米国の強い働きかけにより政府主導で推し進めた政策であり、戦後の数ある利権の中でも巨大利権構造の象徴である。「原発むら」住民の学者は真実を語らない。意図的に作られた「原発の安全神話」は、大自然の猛威によりもろくも崩され、真実が明らかになった。即ち「原発は人類の存続に関わるこの上なく危険な存在である」ということが。にも拘らず、またしても政府は国民の反対の声を無視して強引に大飯原発の再稼働を決定した。また事故が起きたらいったい誰が責任を取れるというのか。狭い国土に暮らす日本人の生存の問題である。将来、市民の力で脱原発が達成できたなら、日本に真の民主主義が根付いたことになるだろう。

第一部の基調講演では、**安保 徹先生**（新潟大学医学部大学院教授）は昨年に続き、ミトコンドリアの働きから見た病気にならない生き方をユーモアたっぷりに講演された。「体温を上げること、日光に当たることがミトコンドリアの活動を活発にすること。血液型のすべてのタイプがバランスよく存在するのは日本人だけであり、これは混血が進んでいて、日本人が優秀であることを示すものだ。将来、なにか良いことがありそうだ。」

渡邊 昌先生（日本総合医学会会長）の講演は、自らの糖尿病克服体験を踏まえて、医療費削減への具体的な提言と統合医療大学院設置へ向けた準備を紹介された。

第二部の特別講演では、**星 寛治先生**（たかはた共生塾顧問、農民詩人）は、山形県高島町で有機農業に取り組みながら地域起し、人づくり、都市との交流、農業後継者の養成を実践されてきた長年の成果を報告された。星さんの 32 年間の活動はドキュメンタリー映画「いのち耕す人々」（2007 年公開）で紹介されている。（DVD 販売中）すでに甲田先生のめざす「健康むら」を山形県で実践されているのである。

境野米子先生（薬剤師、福島県教育委員）は、甲田療法での難病克服の体験発表と福島原発事故の放射能汚染の状況を報告された。その中で、子供達の悲痛な叫び声を紹介され、また「福島だけがどうして放射能汚染で苦しまなければいけないのか？原発を電力消費地に移せばいいのではないか？」と地域差別を訴えられた。

パネルディスカッションでは、福島原発事故の問題に多くの時間が発表された。質問時間では、会場から大飯原発再稼働に反対してハンガーストライキをされている榎田 劭（たかし）顧問、昇 幹夫医師の特別発言があった。

第三部の大交流会では、夕食後定員 72 名の会場一杯参加者があり、活発な意見の交換がなされた。特に脱原発問題と放射能の環境、農業、農産物汚染の除染の取組、対策などに多くの意見が集中した。

わが国は人類初で唯一の被爆人体実験された国であり、またしても原発放射能汚染の実験場になってしまった。今後 10 年、20 年、30 年後にどのような影響が出るのか、誰も分からない。政府を始め我々大人は、未来の日本を担う子供たちに放射能被害を出来る限り喰いとめる努力をしなければならない。